

# こしえるびと

つむぐストーリー vol.122

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”のメッセージをシリーズで紹介していく。

## 南国植物の魅力に引かれ

冬の寒さを感じさせない温室の中、ぎつしりと置かれた南国フルーツや多肉植物。千葉一男さんは、生育を確認しながら優しいまなざしを見せる。

高校生の頃に読んだ図鑑をきっかけにサボテンや多肉植物の魅力に引かれ、栽培を始めた。高校卒業後、地元企業に就職してからも興味は尽きず、その後さまざまな多肉植物の種を購入し、育て続けた。手元には植えてから50年経過したものや高価な品種もある。温室は冬の寒さから植物を守るために自作。家の裏山から伐採してきた木材や竹を使い、なるべく経費をかけずに建設したハウスや温室は合わせて4棟。大きくはないが、温度管理ができるようにしている。

## 東北の地でバナナの栽培に挑戦

バナナの栽培は、10年ほど前に通信

販売で苗を購入して始めた。最初に購入した「ドワーフモンキーバナナ」は、

寒さに弱いが高さ1メートルほどで花が咲き実のなる矮性品種。ハウスに植え、冬囲いをして、春に冬囲いを外すと枯れてしまっていた。その後、栽培や品種を調べ、食用で寒さに強い「アイスクリューバナナ」に注目した。しかし、寒さに強い品種は大型で、すぐにハウスに収まらなくなるほど大きくなった。サイズを整えるため切り戻すと花は付かず、ハウスでの栽培を断念。ある時、バナナの根がサトイモに似ていることに気づき、春から秋は露地に植え、冬は種イモを貯蔵するように掘り起こし、保温したハウスで越冬させると、枯らすことなく冬越しできた。2022年に念願の初収穫。その後、3年連続でバナナの収穫に成功している。完熟したバナナは、スーパーで購入したものよりおいしく、地域の人たちにも配り、家族と一緒に味わった。

## 地元を笑顔にしたい

千葉さんのハウスには、バナナの他、レモンやパッションフルーツなどの南国フルーツが所狭しと植えてある。「バナナや南国フルーツが岩手でも栽培できれば、安く買えるようになる」という未来を思い描き、バナナの栽培に挑戦している人の手助けをしていきたいと考えている。バナナの栽培仲間は徐々に増え、ネットワークも広がっている。

長年栽培してきた多肉植物は近年愛好者が増え、5年ほど前から地元の市民センターで寄せ植え講習会の講師も務めている。自ら増やした多肉植物を使い、育て方のポイントなどを指導し、喜ばれている。

いずれは、地元東山町松川で開かれる「どんこ市」や「まつが市」でバナナを販売したいと意気込む。「バナナの栽培を通じて、地元を盛り上げたい」。思いを胸に千葉さんは挑戦を続ける。

# 南国フルーツの栽培を東北の地で

東山町松川 千葉一男さん





## PROFILE

**千葉一男**さん (71)

Kazuo Chiba

東山町松川

1953年東山町松川生まれ。地元企業に勤めながら、趣味でサボテンや多肉植物を栽培。10年ほど前からはバナナなど南国フルーツの栽培を始め、冬越しの研究を重ねている他、多肉植物の寄せ植え教室の講師を務める。水稲5畝。妻、子、孫の4人家族。

